

言語学と非標準的言語^{*,1}

本 間 伸 輔

1. はじめに

方言にはいわゆる標準語にはない独自の表現が存在し、また標準語とは異なるアクセントのパターンがあることは明白な事実である。また、10代から20代の若い世代の人たちが話すことばにも、標準語にはない表現が多く含まれている。このことから、方言や若者ことばとは標準語の規範から逸脱した非標準的なものとみなすのが、ごく一般的な認識のしかたであろう。しかしながら、現代言語学の観点から見た場合、上のようなことば同士の優劣のつけかたはさほど重要ではない。方言も若者ことばも標準語とは異なるそれ自体の体系（文法）を持ち、その体系を記述しようとするのが言語学の基本的な任務であると考えられるからである。² さらに、すべての人間言語には普遍文法と呼ばれる人間言語一般の大原則があるという生成文法理論の観点に立てば、方言も若者ことばも人間言語である限り、標準語や他の言語と共通の仕組みを基盤としており、一見「おかしな」語彙や表現が存在していたとしても、それらの存在は標準語や他言語に見られる規則性に従った全く自然なことであるということになる。

本稿では、上の論点を経験的に支持する事例研究として、新潟方言の動詞および特に若者ことばに見られる「全然」の用法を考察する。³ 標準語には存在しない動詞や用法であっても、標準語に見られる動詞語形変化の規則に従っていること、および他言語に当該用法を持つ言語表現があることを示し、これらの言語表現が少しも特殊なものではないことを示唆する。

2. 新潟方言の動詞

2.1 ヤメル (LHL)⁴

新潟方言に存在するこの動詞は次のような使い方をする。

(1) 昨日から奥歯がヤメルが、明日医者でも行こか（大田(1995)）

「奥歯がヤメル」とは、意味的には標準語の「奥歯が痛む」にほぼ相当する。「ヤメル」には、このように身体部位を表す名詞句を主格主語としてとるという性質がある。標準語には、身体部位を目的語とする「(身体部位を) 病む」という動詞があるが、「ヤメル」と「病む」は共通の語幹を持っていることから、この二つには何らかの関係があると推測できる。そこで、語尾に注目してみると次のパターンになっていることがわかる。

(2) a. (身体部位が) yam-e-ru

b. (人が 身体部位を) yam-u

このように、「病む」の語幹に接辞 -e- を付加することによって「ヤメル」が得られる。さらに、「病む」は身体部位名詞句を目的語にとる他動詞であるが、「ヤメル」は身体部位名

詞句を主語にとる自動詞である。

このような関係にある動詞は能格動詞と呼ばれ、英語や日本語に数多く存在する。このうち、他動詞に反使役化接辞 *-e-* を付加することによって自動詞が得られるという関係になっているものは以下の通りである。^{5,6}

- (3) 焼く／焼ける (yak-u/yak-e-ru) 割る／割れる (war-u/war-e-ru)
 抜く／抜ける (nuk-u/nuk-e-ru) 取る／取れる (tor-u/tor-e-ru)

これらはいずれも、「魚を焼く／魚が焼ける」のように他動詞の目的語が自動詞の主語に相当するという特徴を持っている。

すなわち、動詞「ヤメル」は標準語にこそ存在しないものの、標準語が持っている「他動詞 + 反使役化接辞 → 自動詞」という規則が「病む」に適用した結果存在している動詞であると捉えることができる。このことから、動詞「ヤメル」は少しも標準語から逸脱した特異な存在ではなく、むしろ標準語が持っている規則に忠実に従っている動詞であると言える。

2.2 ズル(HL)／ズラス(LHL)

この動詞は次のように使われる。

- (4) a. 汽車がズッタ
 b. 汽車をズラスのは難しい

「汽車がズッタ」とは、静止していた汽車が動き出したという事態を表しており、「汽車をズラス」とは、やはり静止している汽車を運転して動かすという行為を表している。この「ズル／ズラス」は *zur-* という語幹を共有しており、さらに「ズラス」の目的語が「ズル」の主語に対応していることから、やはり能格動詞と考えられる。

この動詞の語尾に着目してみると、次のパターンになっていることがわかる。

- (5) a. 汽車が *zur-u*
 b. 汽車を *zur-as-u*

すなわち、自動詞「ズル」の語幹に使役化接辞 *-as-* を付加することによって他動詞「ズラス」が得られる。この規則によってペアをなしている能格動詞も数多く存在する。

- (6) 動く／動かす (*ugok-u/ugok-as-u*) 鳴る／鳴らす (*nar-u/nar-as-u*)
 乾く／乾かす (*kawak-u/kawak-as-u*)

従って、「ズル／ズラス」も標準語に存在する使役化接辞付加の規則によって対をなしているもので、すこしも特殊な動詞ではないことがわかる。⁷

2.3 マカル(LHL)

新潟方言の動詞「マカル(LHL)」は次のように用いられる。

- (7) a. おれがこのがん(を)マカってくすけ、おめ、そっちのがんせえや
 (おれがこれをマカっておくから、おまえ、そっちをやれよ)
 b. (人)が(仕事)をマカル

「マカル」は、標準語にも存在する「任せる」と語幹が共通し、しかも「任せる」から使役主を引いた意味を持っていることから、この二つの動詞がペアをなしていると推測できる。これらの語尾と項の取り方は次のようにまとめられる。

- (8) a. (人1) が (仕事) を maka-ru
 b. (人2) が (人1) に (仕事) を maka-se-ru

このように、「マカル」に接辞 -se- を付け加えることによって、「任せる」という形が得られ、同時に「マカル」の主格主語であったものが、「任せる」では与格を伴って表れるという関係になっているものと捉えることができる。

この交替パターンはまさしく日本語（標準語）に見られる、単他動詞・複他動詞交替のパターンである。⁸

- (9) 浴びる／浴びせる (abi-ru/abi-se-ru) 見る／見せる (mi-ru/mi-se-ru)
 かぶる／かぶせる (kabu-ru/kabu-se-ru) 着る／着せる (ki-ru/ki-se-ru)

いずれのペアにおいても、一方に接辞 -se- を付加することによって他方が得られるという関係になっている。さらに、「マカル／任せる」同様、-se- なしの単他動詞で主格主語として出現する名詞句が、-se- の付いた複他動詞では与格「に」を伴って表れるという関係になっている。

- (10) a. 太郎が 水を 浴びた
 b. 次郎が 太郎に 水を 浴びせた

すなわち、複他動詞の「任せる」に派生的に対応している単他動詞が「マカル」であると捉えることができる。だとすると、新潟方言の「マカル」は決して特殊な動詞ではなく、日本語の動詞交替の規則に従って存在している動詞であるといえる。

2.4 カズク(LHL)／カズケル(LHHH)

このペアも「マカル／任せる」同様の交替を示す。大きく分けて二通りの用法が見られる(野口(1999))。

- (11) a. 子供が ランドセルを カズイタ (ランドセルを背負った)
 b. 母親が 子供に ランドセルを カズケタ (ランドセルを背負わせた)
 (12) a. 係長が 一人で 責任を カズイタ
 (本来負わなくてもよい責任を負った)
 b. 無能な部長が 係長に 責任を カズケタ
 (本来部長が負うべき責任を係長に負わせた)

いずれにおいても、「カズク」の主格主語が「カズケル」では与格を伴って表れるという関係になっており、2.3 で見た単他動詞・複他動詞の関係になっていることが分かる。異なるのは、(13)で見るとように接辞の部分である。

- (13) a. ランドセルを kazuk-u
 b. ランドセルを kazuk-e-ru

このように、「カズク」から「カズケル」を得るのに、2.3 の動詞群とは異なり接辞 -e- の添加が行われている。この接辞によって単他動詞・複他動詞交替が起こる動詞は標準語にも存在する。

- (14) 含む／含める (hukum-u/hukum-e-ru) 挟む／挟める (hasam-u/hasam-e-ru)

-e- による交替を示す単他動詞・複他動詞のペアは数少ないようであるが、少なくとも、「カズク／カズケル」は標準語が持っている交替規則に則った動詞交替のパターンを持っていることから、存在していても少しも不思議ではない動詞であると言える。

3. 「全然」について

標準語において、「全然」は否定文に生起可能であるが、肯定文には現れることができない。

(15) a. あの映画, 全然おもしろくなかったよ。

b.* あの映画, 全然おもしろかったよ。

しかしながら、若い世代のことばでは(15b)のように肯定文の「全然」が可能である。それでは、(15b)を容認可能とする話者にとって、(15b)のような肯定文の「全然」はいったいどのような意味をもっているのであろうか。

インフォーマントによれば、(15b)は「すごく／非常におもしろかった」とは同義ではなく、(16-17)のような文脈において使用するのが最も自然である。⁹

(16) A : 今日の映画, おもしろくなかったなあ。

B : わたしは, 全然おもしろかったよ。

(17) A : 今日の映画, おもしろくなかったの？

B : ううん, 全然おもしろかったよ。

ここで気が付くのは、(16B), (17B)の発話とはともに(16A), (17A)の否定命題に対して肯定命題を対比させて発したものであるということである。このことから、肯定文における「全然」は、否定命題に対する肯定性の強調という意味機能を担っていることが分かる。実際、肯定命題に対して肯定の「全然」を用いるのは不自然と判断された。

(18) A : 今日の映画おもしろかったね。

B : # うん, 全然おもしろかったよ。

(19) A : 今日の映画おもしろかった？

B : # うん, 全然おもしろかったよ。

このように、若者ことばに見られる肯定文の「全然」の意味機能が明らかになったが、では、このような意味機能を持つ表現が存在することは、日本語の若者ことば特有の現象なのであろうか。否定命題に対する肯定性の強調を表す表現の存在が人間言語一般に許されているのであれば、他の言語にも同じ意味機能を担う表現があってもおかしくない。実際、英語にそのような表現方法が存在する。

英語の助動詞 do は、疑問文と否定文に生起するのが無標の場合であるが、肯定平叙文や肯定命令文に現れることも可能である。これは「強調の do」と呼ばれるものであるが、現在時制に過去時制を対比させたり((20)), 命令の力を強くする((21))といった意味機能の他に、否定命題に肯定命題を対比させ、肯定性を強調する((22))といった意味機能を備えている(Declerck(1991), Quirk et al. (1985))。

(20) He owns --- or DID own --- a Rolls Royce. (Quirk et al.(1985))

(21) Do come in ! (ibid.)

(22) a. A : Why didn't you warn them?

B : I did warn them. (Declerck(1991))

b. But I DO think you're a good cook. [*ie* '... even if you imagine I don't']

(Quirk et al. (1985))

例えば、(22a)のAの発話は“You didn't warn them.”という否定命題が前提となっており、

これに対してBが「否定ではなく肯定である。」と言っているものである。

このように、若者ことばにおける肯定の「全然」と同じ意味機能を備えた表現法が他言語にも存在することから、肯定の「全然」は決して特殊な表現ではなく、むしろ人間言語一般に存在することが許されている表現であることが分かる。

4. 結 論

本論文では、新潟方言に見られる動詞と若者ことばにおける肯定文の「全然」について考察し、ややもすれば非標準的と位置づけられるこれらの言語表現が、実は人間言語の原則から少しも逸脱した存在ではないことを確認した。このことによって、どんな人間言語も言語の大原則を守っているという生成文法理論の立場に経験的な支持を与えたことになる。

<注>

* 本稿は「ことばを考える会第2回研究会」(平成14年3月9日 新潟大学)および「第37回新潟大学英文学会」(平成14年10月19日 新潟大学)における発表内容に若干の修正を加えたものである。発表内容についてコメント・質問を下された方々、新潟方言のインフォーマント調査に協力してくれた方々、および「全然」のインフォーマント調査に協力してくれた新潟大学教育人間科学部の学生の皆さんに感謝申し上げたい。

¹ 「非標準的言語」は、一般に流通している用語ではないが、ここでは、地域方言や若者ことばなど、ある言語のいわゆる標準語とは異なる変種のことを指すものとして用いる。

² O'Grady and Dobrovolsky (1995) より。

³ 本稿で取り扱う新潟方言のデータは、新潟市内(旧新潟市内および旧西蒲原郡黒埼町)で話されている新潟方言より得たものである。

⁴ かつこ内の記号はピッチを表す。L = low, H = high

⁵ 影山(1996)参照。なお、反使役化接辞という用語であるが、「(人が) 気を揉む (mom-u) / 気が揉める (mom-e-ru)」のように他動詞主語が意味上使役主と呼び難いような動詞も存在する。「病む / ヤメル」はこのような動詞の一つであると考えられる。

⁶ 語末の -u/-ru は、異形態の関係にあり、直前が子音の場合に -u、母音の場合は -ru となる。

⁷ なお、標準語には「ずれる / ずらす」という能格動詞対があるが、これらの動詞は「汽車などの乗り物が動く / を動かす」という解釈を持たないという点で、「ズル / ズラス」とは異なる性質を持っていることに注意されたい。

(i) a.* 汽車がずれた b.* 汽車をずらした

⁸ 単他動詞・複他動詞という用語は、奥津(1980)、井上(1989)で採用されている。

⁹ データは、新潟大学教育人間科学部の学部生および科目履修生(20-23歳)24名のインフォーマントから得た。

<参考文献>

- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
 井上 和子(編)(1989)『日本文法小事典』大修館書店
 影山 太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
 野口 幸雄(1999)『越後・佐渡方言散策』新潟日報事業社

O'Grady, William and Michael Dobrovolsky (1995) *Contemporary Linguistic Analysis I :*

An Introduction. Newbury House/Shohakusha.

奥津敬一郎 (1980) 「動詞文型の比較」『日英語比較講座 第2巻 文法』(國広哲彌編)

大修館書店

大田 朋子 (1995) 『独断大田流 にいがた弁講座』新潟日報事業社

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman.